



冠詞と形容詞の基本ルール

英文法入門⑧

- 冠詞と形容詞を同時に扱う理由
- 冠詞の種類と役割
 - 意味カテゴリー
 - 可算名詞/不可算名詞
- 形容詞の役割と2種類の用法
 - 限定用法
 - 叙述用法
- 一筋縄ではいかない形容詞

冠詞と形容詞を同時に扱う理由



基本文型の学習がひととおり終わり、その文型の脇を固めるのに不可欠な前置詞句についても多くを紹介しました。これで基本な文（動詞がひとつしかない文）の文型をとるのに十分な知識が備わったことになります。しかし、実際にたくさんの英文の文型をとっていく前に、まだ学ぶべきことが残っています。それは**冠詞と形容詞**です。

ではなぜこの2つを同時に説明するのでしょうか。

文型はVが下支えする体系ですが、その中で欠かすことのできない要素はなんだったでしょう。そう、文の要素、つまりS, O, Cです。ではこの要素に入る品詞は？「**名詞**」ですよ。Cには形容詞が入ることもありますが、**文の要素の大半には名詞が入る**のです。5つの基本文型すべてが備えるSには、名詞のみが排他的に入ることが許されています。しかし、実際にはこの名詞ボックスに単純な名詞が入るばかりではありません。**名詞には“名詞を飾る別の品詞”がつきものなのです。その“飾り”というのが「冠詞」と「形容詞」です。**冠詞と形容詞、この2つの品詞は「**名詞にかかる**」のが特徴で、さらにいえば「**名詞にしかかからない**」。文型に置いて不可欠な要素である名詞に関わる重要項目であるこの2つは文型をとるうえで絶対的に必要な知識であるだけでなく、互いに関係もしています。

この回では、冠詞と形容詞についていくつかのルールを紹介しますが、常に「**名詞のまわりで起きることだ**」という意識をもって学習に取り組むことをオススメします。

冠詞の種類と役割



【冠詞の種類】

- a / an / the
- 数量を表す形容詞 (some, any, many, much, every, eachなど)
- 所有代名詞 (my, your, our, their, Tom'sなど)

【冠詞の役割】

- 名詞句のはじまりを示す
- 名詞の意味カテゴリーや数を示す
(どちらも日本語にはない概念なので冠詞の扱うのはとてもとても難しい)

冠詞は名詞句のはじまり

Q: では名詞句の終わりは…？

－ A: **名詞**

【原則】

冠詞から次の名詞まで、全部ひとまとまりでひとつの名詞句。冠詞から名詞の間のはすべて名詞にかかる。

the blue shirt
冠詞 名詞

some quite important events
冠詞 名詞

Jean Valjean's harsh, miserable life
冠詞 名詞

冠詞～名詞間のはすべて名詞にかかる形容詞句と考えてよい



意味カテゴリーと数

意味カテゴリー

①theのカテゴリー

複数人の間で共通の認識がなされているもの。

②a/anのカテゴリー

theのカテゴリーに入らないもの。

冠詞が付くのは一般名詞のみ。

固有名詞など初めからこの世にひとつしかなく特定されているものはそもそもカテゴリーや数の概念を必要としないので、冠詞はつかない。(山・川などの自然物には例外的にtheがつくが。)同じく代名詞にも、元の名詞を冠詞含む名詞句として受けているので冠詞はつかない。

また、話の最初では話し手しか知らず、a/anで語られた名詞も、話の中で聴き手との共通認識が取れたらtheで語られるようになる。

数

①可算名詞

数えられる名詞で複数形を持つ。
必ず冠詞が付く。

②不可算名詞

数えられない名詞に複数形がない。
冠詞 a/anを付けられない。

waterやairなど形を持たないので数えないという感覚的に理解できるものもあるが、同じ概念なのにopinionは可算、infotmationは不可算、同じモノの分類なのにdeviceは可算、futnitureは不可算など、結局覚えるしかないというところが多い。リーディングならわからなくも問題なし。英会話なら間違えながら覚えていけばよい。受験、資格、ライティング用途ならマスト。

形容詞の役割と 2 種類の用法



【形容詞の役割】

- ①名詞にかかる
- ②Cになる → <SVC>のときはSの説明、
<SVOC>のときはOの説明

いずれにしても
名詞を修飾する！

【2種類の用法】

- ・ 前から名詞を修飾する（限定用法（制限用法））
- ・ 後ろから名詞を修飾する（叙述用法（非制限用法））

※例外多数。原則やルールではなくあくまで傾向として理解する。

前から修飾（限定用法）



The blue shirt, please!



（参考程度）
かかる名詞の本質的な特徴について
述べる文と相性が高い

彼の言葉を前から聞きましょう。

「The…」なにかしら共通認識があるものについて話してます。

「blue…」青いものについて話してます。この時点で聴き手の注意は視界にある「青いものに限定」されます。

「… shirt, please!」ああ、あれが欲しいのね。

こんな感じで、形容詞が前からかかるとき、名詞の登場までに形容詞が説明する情報によって、聴き手の思考が限定されていきます。これが限定用法の感覚。形容詞が前から名詞を修飾するからこそ起きる現象です。

後ろから修飾（叙述用法）



The shirt is blue!

（参考程度）

かかる名詞の一時的な状況について述べる文と相性がいい

また彼の言葉を前から聞きましょう。

「The…」なにかしら共通認識があるものについて話してます。

「shirt…」シャツについて話していますね。シャツがいったいなんだっていうのでしょうか。

「… is blue!」ああ、ほんとだ。青いね。なんで急にシャツの「説明＝叙述」したの？

こんな感じで、形容詞が後ろからかかるとき、名詞が先に登場するので、聴き手の思考にまず名詞がぶち込まれます。その名詞ついて「それってどういうものなの？」という叙述表現が形容詞として後ろからついてくる感覚です。

限定用法と叙述用法を巡る諸々

- This late trend won't last long.
「この最近の流行は長続きしないだろう。」
- It is too late. 「もう遅い。」
- To certain extent. 「ある程度は」
- I'm certain of her triumph.
「彼女の勝利を確信している。」
- He has already been asleep.
「彼はもう寝た。」
- The former example sounds better.
「前者の例の方が良さそうだ。」

限定用法と叙述用法で
意味が違う(ことがある)

どちらかでしか
使えない



前/後ろからルールをかき乱す英語の特徴

- **1語の形容詞は後ろから名詞にかかれない**

例外 1 : some-, every-, any-, no-系の名詞 (somethingなど) には必ず後ろから形容詞がかかる

例外 2 : 「一時的な状態」に焦点が当たっている場合は1語の形容詞が後ろから名詞にかかることがある
ex.) person considered / resources provided / things available

- 長いものは後ろに書きたい

→2語以上からなる形容詞句は

後ろからでも叙述用法でかかることが多い。

- 形容詞節が名詞にかかるときは、必ず後ろから名詞にかかる (詳細は節の回にて説明。)

